

小田切秀雄

現代の作家

その意味と位置

冬樹社

現代の作家——その意味と位置

昭和47年12月30日 第1刷発行

著者 小田切 秀 雄

発行者 高 橋 直 良

発行所 冬 樹 社

東京都千代田区神田神保町2-18

電話 東京(264)0346番(代表)

振替 東京7757番 郵便番号101

0095-10169-5190 (株)稲葉印刷・美成社製本

定価は外箱に表記してあります

目
次

山田美妙・広津柳浪・川上眉山・小栗風葉	7
島崎 藤村——『破戒』と生の様式	20
小泉 八雲——そのよろしさ	29
長塚 節——『土』を中心に	33
石川 啄木——花と啄木	42
夏目 漱石——『虞美人草』のおもしろさ	51
志賀 直哉——現代文学史のわから	55
永井 荷風——反絶対主義	82
高村光太郎——デカダンスの詩人としての	87
沖野岩三郎——革命派の牧師作家	97
川端 康成——美的デカダンス	112
中野 重治——その仕事。美と政治と	119
林芙美子と平林たい子	157

佐多 稻子——人と作品	170
小熊 秀雄——昭和文学の問題のなかで	180
椎名 麟三——『美しい女』の年	221
武田 泰淳——危険を飼いならす	238
大田 洋子——現代の地獄の証言	251
井上 光晴——作家的な出発	258
高橋 和巳——『白く塗りたる墓』	263
金石範・金鶴泳・高史明	266
五木 寛之——エンタテインメントと芸術と	285
初稿発表誌紙一覧	296
あとがき	298

現代の作家——その意味と位置

山田美妙・広津柳浪・川上眉山・小栗風葉

日本近代文学形成期のあわただしい激動のなかで、それぞれに意義ある個性的な仕事をもってその形成に参加し、その時期なりの美しい作品を残しながら、やがてたちまちその個性が時代の発展と組み合わなくなり、不幸な晩年を迎えた四人の作家をここにとりあげる。かれらはいずれも古いものをつくさん背負ったままで、手さぐりで強烈に自己の新しい作家的世界をつくりだしたひとびとであっただけに、時代の急激な転換についてゆけなかった。その典型は広津柳浪である。かれは『変目伝』、『今戸心中』等のいわゆる『深刻小説』で注目され、それらはいまなお印象あざやかなすぐれた作品であるが、自分の小説のあまりの暗さに堪えられなくなり、一時その裏がえしとして、『光明小説』などに転じながら、そんなものがうまくゆくはずもなく、明治三〇年代の中ごろからは身動きがとれなくなつた。やがて毎日ただ黙然と机の前で坐り続けるようになり、そのまま晩年にまで及んだ様子は、息子広津和郎の回想録『年月のあしおと』（講談社刊）のなかに書きとめられている。作家の個性や誠実ということと、時代の発展との最もいたましい関係の一つがここにあった。しかしこれは、ひとり柳浪だけのことでなく、山田美妙にも、川上眉山にも、小栗風葉にも、多かれ少なかれ共通していた。眉山の自殺はそのいちじるしい現われの一つである。

明治二〇年の二葉亭四迷『浮雲』第一篇の刊行をもって生誕した日本近代文学は、明治三九年島崎藤村の『破戒』刊行にはじまる自然主義・反自然主義の時代に、文学としての確立をみるにいたるが、そのかんの二〇年という歳月は、多くの作家たちによる種々の手さぐり、試行錯誤、動揺、挫折、犠牲、等によって満たされており、まさにそれらを通して日本近代文学確立の道がつくりだされたのであった。若くして死んだ北村透谷と樋口一葉とはその犠牲の代表的な例であるが、柳浪・眉山をはじめ美妙・風葉も、またべつの形の犠牲であった。そういう犠牲となることをよぎなくされるだけの強烈なものをもっていったのがこれらの作家であり、それだけに、いま読みかえすにあたいするだけのものをつくりだしていたのである。

山田美妙の代表作の一つである『武蔵野』は、明治二〇年一月から一二月にかけて『読売新聞』に連載されたもので、のち単行本『夏木立』（明治二二年八月刊）に収められた。この年は、まだまだたく無名だった二葉亭が前記の『浮雲』第一篇を、表紙だけ坪内逍遙の作ということにしてもらってようやく刊行しえた年で、二葉亭が絶望したほどにそれは世から迎えられなかったが、美妙のほうはすでに『我楽多文庫』の硯友社グループの中心の一人として認められ、この年七月からは雑誌『良都女』の編集に迎えられてさかんに諸種の文章を書きはじめていたので、この一九歳の青年作家の新聞小説『武蔵野』は、次のような作品上の特色とあいまって、たちまち広く注目されるにいたった。第一にその文章。いま読めば、まったくアイサツに苦しむようなこの奇妙な文章は、日本近代文学史を叙述するすべての書が必ず言及するところの、山田美妙による文章改革の先駆的な努力の、その最もきらびやかな試みなのである。近代文学の文章・国語表現として必然的な言文一致体を実現する試

みは、明治の初年から啓蒙学者らによってつみ重ねられていたが、それに一つの仕上げを行なう仕事は文学者が担当せねばならず、二葉亭がまずそれに着手して『浮雲』第一篇はその見事な成果となった。この『浮雲』は、いま読んでもその文章が少しも古びていないほどに、地についた着実な成果を創りだして、その意味で美妙のとくらべてまったくめだたぬ底力を示したのであったが、それだけに、二葉亭がどれだけ独力で苦勞をしたかは、いまでは多くの二葉亭研究者が明らかにしている通りである。これにたいして二葉亭の子供のころの友人であった美妙は、硯友社グループで發揮するようになったその才気のおもむくがままに、言文一致体の新たな試みに進み出て、自分なりの創意とくふうとを存分に發揮するようになった。時代の要請の先端部をとらえる鋭いカンをもちながら才気のままに派手にふるまうこの作家の特色は、『武蔵野』の文体のなかにおしみなくあらわれている。かれの言文一致の試みは、前年の明治一九年一月『我楽多文庫』に発表した『嘲戒小説天狗』にはじまっているが（二葉亭はさらにそれよりすこし早く最初の試みを行なった）、この『武蔵野』での前進は、発表場所が『読売新聞』だったこともあって、いわばセンセーショナルな出来事となった。

……松明たいまつの小さいのだから四辺あたりどころか、燈火ともしびを中心として半径が二尺ほどへだつた処には一切闇が行互たがひつて居るが、しかし容貌かたちは水際みづぎだつて居るだけに十分若い人と見える。

こういうところは、燈火とうかを中心として、半径が二尺ほどへだつた処には、とか、水際みづぎだつて居るだけに十分若いとかいう、いまではまったく常識的だが当時としてはまったく目新しい用語と文体の個々の試みを示し、また右の引用のすぐあとには、眼光がんこうが……眼は眼目縁がんもくぎを以下いげの、考えながら

一層正確に言い代えてゆく表現法などをとりいれている。こういう個々の試みのうちには、二葉亭の立ちいらなかったところにまで進んでいるところもあるが、

夜は根城を明渡した。竹藪に伏勢を張ッて居る村雀はあらたに軍議を開初め、闇の隙間から斫込んで来る暁の光は次第に四方の闇を追退け、遠山の角には茜の幕がわたり、……

というような部分になると、擬人法というものを新しくとり入れようとした苦労はわかるにしても、この小説の書きだしのところの『あゝ今の東京、むかしの武蔵野。今は錐も立てられぬほどの賑はしさ、昔は……』云々と重ねられてゆく対句のイメージの強引なのとあわせて、まったく奇妙な文章という印象をおおいがたい。そしてこれは二年後には、『蝴蝶』での次のようなやり方にまっていたる。『西山を啣む二十三夜の残月、今些し前まで降続いた五月雨に洗はれた顔の清さ、まだ化粧は止めずに雲の布巾を携へて折々はみづから拭つて居ます。夜半、それが此時の「美」の原素で、山里、それがこの処の「美」の源です、云々。これにたいして二葉亭はその同じ明治二年の『浮雲』第三篇では、言文一致体を一層練れた着実なものにおし進めており、またその翌年の森鷗外の小説『舞姫』は言文一致体をこそとらなかったが、擬古文体に欧文脈と漢文読みくだし体とを見事に融合させて独自の新文体を創りだしていた。しかし、「だ」どめから「ます」どめの敬語体に移る等、この『蝴蝶』をもふくめて、美妙が日本の近代・現代の文章を創出するために作家として先駆的な試みを行なったひとの代表的な一人であったことは、その新鮮さが過剰な装飾意識や美文意識とわがちがたく結びついていたにしても、高く評価されねばならぬことである。

なお、『武蔵野』は、江戸末期の草双紙類くまじょうしや馬琴の読本よみほんなどにひかれていた美妙が、それらに近い題材をとりあげながら、勸善懲惡的な型通りの展開を排して、戦国時代にありえた悲劇そのものとその悲傷の気分とを描こうとした点で、坪内逍遙『小説神髓』らしい近代小説への手さぐり、婦女用の娯楽読物からなんらか人生的な重みある文学への接近の試み、欽定憲法体制の進行によってしめつけられた個性の浪漫的悲傷にたいする気分的な同感、等を意味するものとして、その文章上の大胆な試みとともに時の注目を集め、かれは硯友社の仲間尾崎紅葉よりも一足早くはなやかな存在となった。紅葉がこれとあい似た題材と気分とで、この小説は涙を以て主眼とす、という触れこみで、『比呂色二〇色〇懺悔』を發表したのは、『蝴蝶』のなお三ヵ月後にあたる明治二二年四月になってからで、紅葉が広く注目され美妙をしのぐようになるのはこれいごのことである。

『蝴蝶』は『国民之友』明治二二年一月の文芸附録に出たもので、恋よりも忠義の方が大事というよるな運びにしながら、忠義を實行したときにはすでにその対象たるべき存在が失われていた、という結末によって逆に恋の悲しさをも示す、という中途半端な作品で、『武蔵野』と同じように文学史的な意味で注目にあたいするものをもってはいるが、この作品がとくに評判になったのは主人公の宮女蝴蝶の裸体姿の挿画のゆえであった。これは当時のひとびとを驚かした。美妙が画家渡辺省亭に注文したもので、保守的な世間の指弾をあびたが、岩波文庫版の『蝴蝶』に塩田良平がそえた解説によると、今回の附録大喝采を博し誠に先生ノヲ以て最となす、感謝感謝」と『国民之友』主幹の徳富蘇峰が美妙に書き送った私信が現存している、という。これはつまらぬ裸体画だったが、封建的禁慾とそれを裏面で補充する好色とに、全面的に対立するすぐれた裸体画の実現をもとめはじめていた日本近代の美意識の一つの最先端部に、美妙はここでもいち早く形の上でだけは触れていたのである。

かれは明治二一年から『言文一致概略』を『学海之指針』に連載、また、小説雑誌『都の花』の主筆となり、長篇『花くるま』・『いちご姫』等を連載、また『国民之友』への『日本俗語文法論』・『日本韻文論』の連載、等と多面的な活動をくりひろげ、それぞれに先駆的な才能のきらめきを示したが、尾崎紅葉を中心に硯友社がしたいに文壇を支配するようになったときに、幸田露伴のようにひとりそれと対立して独自の世界の形成に進むだけの文学的な確かなものをもつことはできなかった。やがてスキヤンダルおよびそれに類したことを、年をおいてはひきおこして萎縮させられる。——そして一〇年ほどして、それを脱却する試みの一つとして異色の作『比律賓独立戦話・あぎなるど』の前篇と後篇各一冊を書きおろすことになる。これの前篇は明治三五年九月一日発行、後篇は同三〇日発行、いずれも小さな四六判で二冊通し頁三八六、そのあとに「おくがき」と「比律賓の殉難志士（グレゴリーオ、デル、ピラール將軍伝）」・「比律賓の亡命志士（マリアアノ、ボンセ氏）」・「蚕に寄せて比律賓の志士へ」という美妙の詩、二冊ぶんの「要目索引」、計三〇頁ほどが添えられている。

ポーア戦争にさいしてイギリス帝国主義への怒りを歌った薄田泣菫の詩（雑誌『天地人』明治三三年八月号）はあるが、台湾のすぐ南のフィリッピンでの植民的解放・民族独立の闘争と、それが帝国主義化しつつあったアメリカの餌食となる経過とを、多少とも立入ってとりあげた文学作品はこの『あぎなるど』をおいてはない。事態がフィリッピンで進行しつつある時期に美妙はその記録文学的・報道文学的・政治文学的なこの書を書き進めていたのであって、ことの全体的経過を構成的に示すよりも、叙述の前後を無視して、途中でホセ・リサールの生涯と活動を書くことに没頭したり、アメリカの帝国主義化へのはげしい批判の論を作者がのりだしてめんめんくりひろげたり、当然説明しておくべきこと、追及しておくべきところをまったく空白にしたままに先に進んでしまったり、という

ふうに、作品として熟したものでなく、むしろ欠点のはなはだ多いもので（そのために従来の文学史的評価ではこの作品はとりあげられたことなく、したがって翻刻も収録もされたことがなかった）、明治一〇年代の政治小説がそのスタイルのまままで復活したようなおもむきもあるが、同時にここには、かつてその政治小説が示してそのご文学から消えてしまった強烈な民主主義的なナショナリズムが、フィリピン解放闘争をめぐる記録的・報道的な叙述として高揚した姿を現わし、世界が一九世紀から二〇世紀帝国主義の時代に入ろうとする歴史的な大状況をフィリピン——スペイン——アメリカ——日本の関係においてとらえている。その前年の明治三四年四月に幸徳秋水は先駆的な名著『廿世紀帝国主義』（岩波文庫、等）を出してこの新たな世界的な大状況を鋭く提出し、そのなかで、『米
国にして真にキューバ叛徒の自由の為に戦へる乎、何ぞ比律賓人民の自由を拘束するの甚しきや。真にキューバの自主独立の為に戦へる乎、何ぞ比律賓の自主独立を侵害するの甚しきや。夫れ他の人民の意志に反して、武力暴力を以て強圧し、其地を奪ひ富を掠めんとす。是れ実に文明と自由の光彩燦爛たる米国建国以来の歴史を汚辱するの甚しき者に非ずや』、というていどには論じていた。美妙は、秋水のような視野はもたなかったが、フィリピンについては、進歩的なジャーナリストの山県悌三郎を通じてマリアノ・ポンセラ亡命のフィリピン青年としたしむにいたり、作家としてかれらを支援するという強烈な自覚のもとに文献をしらべまた直話をもとにして、この『あぎなるど』をまとめたのである。この本は山県の内外出版協会から刊行されている。

なお、レーニンの『帝国主義論』は、アメリカがアギナルドにたいしてとった態度に関して、アメリカ内部からこれを『排外主義者の欺瞞だ』として論難する反対派が生じたことに触れているが、美妙もこの本でその反対派の議会演説をたっぷり訳出して、それはそれで十分におもしろいのだが、

そのリンカーンらしいの骨っばい民主主義的主張を、美妙がほとんど自分の論のように無邪気にふりかざして、それが天皇制の日本においての民主主義圧殺の実情とどうかかわるかはそのこしも顧られていない。美妙はこの書の一ヵ月前に刊行した『桃色絹』でもやはりフィリッピン独立への支持を示すというふうに、この時期たいへんに熱心になりながら、アギナルドがアメリカによって逮捕・投獄され、フィリッピン解放運動がつぶされるときにも、やがて美妙もこの問題からすっかり立ち去ってしまう。右のような『無邪氣』からでもあろう。

なお、明治四〇年代に入ってから美妙には『二郎経高』（『文芸倶楽部』明治四一年一〇月号、いま岩波文庫版『蝴蝶』）のようなすぐれた歴史小説もあり、自然主義・反自然主義による日本近代小説の確立からそれた場で一つの熟した形を示しているというようなこともあった。

広津柳浪の代表作ということになれば、著名で実際に読みごたえもある『変目伝』^{へめいでん}等の一連のほか、明治二〇年六月から翌年まで『東京絵入新聞』に連載した長篇小説『女子参政廢中樓』^{しんちゆうちゆうろう}（筑摩書房版『明治文学全集』の「広津柳浪集」等に収む）をあげねばならぬ。硯友社の作家として知られたひとでありながら、その以前からどういふ社会的な視野や気骨をそなえていたかがこの長篇によって明らかになる。題名中の『廢中樓』（廢氣樓）ということばから知られるように、明治一〇年代の自由民権運動のなかで社会的に、というよりも思想的に新しく提起された婦人の政治参加・選挙権の問題を、『女子参政黨』の女性たちの活動等の架空物語として展開したもので、山田美妙の『あぎなる』とはまたちがった意味でおもしろいもののだが、芸術的に熟したものとはいえない。ふつうは柳浪の代表作というと、広津和郎が前掲の筑摩版柳浪集の月報に書いていたように、柳浪が最も脂の乗っ